

岡山中百舌鳥会かわら版

今号のTOPIX

- ①平成20年度第1回岡山中百舌鳥会, 総会講演会
- ②中百舌鳥周辺のなつかしい物語: 高島征助氏

1/5

平成20年度 岡山中百舌鳥会 総会と講演会

日時 ; 平成20年6月14日(土) 16:30~20:00

場所 ; ピュアリティまきび(岡山駅より南へ徒歩7分)
岡山市下石井2-6-41、電話 086-232-0511

- 内容 ; 1)総会 ;16:30~17:00 (今回は役員改選期となっています)
2)講演会 ;17:00~18:00 「メッキが拓くデジタル社会」
講師 ; オーエム産業(株) 平松実氏(工金46)
3)懇親会 ;18:15~20:00 会費 7,000円(当日受付にて)

かわら版の記事と内容

会員の皆様に投稿や協力をお願いします(事務局まで)

- ①配信用会員メールアドレスの登録。
 - ②人脈開拓・・・先輩・後輩のありがたさ・・・
 - ③ こんなこと教えて(同窓会員のQ&A)
 - ④私の一押し「人、もの、商品、アイデア、・・・」 ..無料PR頁の提供 など
- ホームページ <http://www1.harenet.ne.jp/~nakamozu/> までお寄せください。

岡山中百舌鳥会では、会員相互の情報交換の場として、メール配信を原則とする「かわら版」を発行することとなりました。主旨は、趣味から仕事・ビジネスまで、常識範囲での自由(無料)の会員相互の連絡掲示板のような機能の場を提供することです。どのような紙面にするかは、会員の皆様からの意見やアイデアを頂きながら、一緒に“歩きながら考えたい”と思っています。まず歩き始めること、一歩踏み出すことが大切ではないかと思っています。ご支援とご協力をお願いいたします。

メール配信できるための会員のメールアドレスを収集することにご協力いただきたいと思います。府立大学同窓生には、このメールをドンドン転送してください。

若い年齢層の新規参加者には思いもよらない風景, それ相当の年齢層の方には、
非常になつかしい風景中百舌鳥物語.....

今回は、高島征助氏(工・修37)にお願いして、昭和30年代後半のころの府立大学界限、要するに南海高野線「なかもず」駅(梅北町)の界限の様子を彷彿させる府立大生のお話を、エッセイ風に書いていただきました。春先からいただいた4篇を今号で一挙に掲載いたします。おたのしみください。

中百舌鳥物語

高島 征助

はじめに：昨年の6月9日に開催された大阪府立大学同門会・「岡山中モズ会」総会で『支部会報』を発行してはどうかという提案がなされた。出席者全員異存はなかった。

「中百舌」は会員一人ひとり、過ごした時代は異なっても、みんな「明日への希望」を胸に過ごした「甘酸っぱい古戦場？」であるはず。斯く申す私も昭和37（1962）年3月20日に学窓を去って50年近くなった。当然のことながら当時の記憶も日に日に薄らいで行く。ここで、厚かましくも自分史とも言える「中百舌鳥物語」を書き残しておくことも、後輩の皆さんに「へ～、当時の中百舌鳥はそんな田舎だったんだ～」と何かの話の種になれば望外の幸せ、機会ある毎に紹介したいと思う。

中百舌鳥物語—その1

「ロゴスを救った勇士たち？」

大学と道を隔てて向う側に、戦前のドイツの哲学への崇拜の名残か、「ロゴス」という小さな軽食堂があったことを覚えている方も多と思う。その食堂の2階は何処（いずこ）の大学の周辺と同様の「ジャン荘」である。たまたま「中百舌鳥」の原っぱにはここが唯一の溜まり場になっており、「機械工学」、「電気工学」、「応用化学」等の専門分野よりも、毎日の経済を「チー・ポン」の中国語で決済するのが大好きな連中の人気スポットだった。

さて、今回のエピソード。昭和36年9月15日。気象庁の予測によれば、「北上中の大型台風（最大風速：40m/hr）は、明16日正午頃、近畿地方には最悪のコース、『室戸岬から紀伊水道を通過する恐れ』という。当時は気象衛星の細かいデータなどなかった時代。しかも、当時の校舎はコンクリートの建物とはいえ、窓の棧は木造であり強い風が吹けばガクガク揺れるような品物。私のフォルケンシュタイン型ヴァキュームラインはその窓に接したストーンテーブルに設置しており、強風で窓ガラスが破れたら「万事休す！」。15日夕方の教室の雑誌会」の後、神にも継る気持ちで、そのストーンテーブルに「赤チョーク」で『鳥居』の印を描いたら、敬虔なキリスト教徒の外山 修教授は苦笑されていた。

さて、台風襲来の16日。下宿にいても落ち着かないので研究室に行った。神戸から通勤の窪川助教授は当然欠勤。しかし、外山教授は学部長という立場から羽衣から出勤された。時々刻々と風雨は強まり、NHKラジオニュースは「台風の大阪直撃の恐れ！」を伝えていた。大学周辺に下宿している学生はほとんど研究室に出てきているのに元気者の4年生の二人の顔がない。風は益々強くなり、応用化学科の建物のバルコニーに出てみると大阪湾上空の雲は「墨汁」を流したような低い雲がびっしり。大学の周囲の民家の屋根瓦が木の葉のように舞いあがっている。「コリヤ、アカン、大阪直撃や！」と思った。私の実験装置の前の窓も強風の直撃の度に息をするように歪んでいる。窓ガラスが破れたら「最早、完全にアウト！」と覚悟していた。約2時間の悪魔の咆哮のような唸りの音。午後3時、風の勢いも少しずつ弱まり西方の六甲山付近にも明るさが見え、どうやら風も峠を越えたようだ。そこに泥まみれの顔の件の4年生の2人が生還？彼らの言い草は「今日はどうせ学校に行っても停電で実験も出来ないから、ジャン卓の上で風を回そうと『ロゴス』に行ったら、いつも顔触れの6人がいたので、外の台風に負けないように頑張ろうと2卓で遊んでいたら突然天井から泥が落ちてきた。それと同時に廊下の西の窓が破れて強い風が吹き込み、屋根が飛ぶかと思ったので、咄嗟に部屋の畳を捲って横にあった洋服ダンスと合わせて窓をふさぎ事なきを得た」と状況報告。彼ら8人は「ロゴス」にとっては何より恩人であったはず。台風一過。私の実験装置は奇跡的に無事だった。外山教授が部長室からお帰りになり「高島、『やっぱり天佑神助』ということはあるものだな！」と感慨深そうに云われたが、私の横にいた泥まみれ（断水で顔を洗うことが出来なかった）の2人の「ロゴス」救援隊の勇士？には怪我がなくて何よりだが、今後敢えて危険な場所に身をおかないように注意しなさい」と諭された。横で聞いていた私も先生の言葉はずしり響いた。

それから月日は流れ、1998年の10月下旬に外山先生が、そして窪川先生も昨年11月中旬に長逝された。その上、先日、府立大の研究室から「泥まみれの〇〇君死去」の知らせあり。浮世は無常。ここに「ロゴスを救った勇士？」への追悼の言葉とする。

中百舌鳥物語—その2

「アマゾネス軍団との戦い」

高島 征助

先の「ロゴスを救った勇士たち」のエピソードも書き綴る直前に携帯電話が鳴り、何事かとキーを押してみると「嘗ての勇士」の死去の知らせ。これだけは如何に陽気な私にも大ショック。そのため明るい話題にしようと思っていた文章が彼の追悼文になってしまった。そこでここでは思い切り楽しい話題を紹介したい。

敢えて軽蔑する訳ではないが、大学の応援団のメンバーは、「六分の俠気、四分の熱」といういささか男気の過剰な連中であるため成績は低空飛行をし勝ちであった。一方、修士課程に在学当時の私は体重48kg（現在、74kg）と痩身であったが、お祭騒ぎとなれば真っ先に駆けつけるというオッチョコチョイであったから、応援団の諸君とは親しくなっていた。

昭和35年の秋の日のことであったと記憶している。応用化学科の4年生で応援団の副団長の彼は第2講座（上池教授）に属しており、大らかな性格が災いしてか物理化学I、II（外山教授、窪川助教授）の科目はX、Xの大鬼門であったが、それでもメゲずに毎日のようにわが研究室を訪問してくれていた。そこで彼曰く「高島先輩、今週の土曜日の午後に中百舌球場で『たかしま屋ソフトボールチーム』に試合を申し込んで来たんだ。是非観に来てくれ」と。その時、「何という身の程知らずの連中だろうか」と思った。何しろ「テキ」は我が国のソフトボール球界の覇者であり、当日、試合も投手は腕を水車のように回して100km/hr近い速球を投げ込んでくるため、「大阪府立大学・応援団」チームの誰一人としてボールがバットに当たらない。15対0、三回コールドゲーム。それでも爽やかに握手を交わして「ゲームセット」。試合後、副応援団長君が私の所に来て「あれでも女の子か？」とぼそりといった。無論、我が方にも高校時代に野球をしていた連中もいたが、大学入学後は勉学に励み？ボールからは無縁になっているのかもしれないが、このキリキリ舞いする様は憐れを乗り越えて喜劇であった。その時の教訓は「トップ技術の素晴らしさ」である。

丁度2年前、新聞紙上に掲載された我が国の上場企業の期末の決算報告書の中の退任役員欄に件の応援団副団長君の名前を見て、彼にとっては遠い日の無謀な対「たかしま屋」戦も決して無駄ではなかったと思った。

随筆(長さは自由)・俳句・川柳など文芸欄を不定期に設けます・・・
皆様の投稿をお待ちします。

中百舌物語—その3

我が特異日「昭和35年10月12日のこと」

高島 征助

誰しも、家族の誕生日など「イヴェント」を伴うのとは別に、奇妙に記憶に残る「特異日」があろう。私にはその特異日が「昭和35年10月12日」である。それは爽やかな秋晴れの日であった。経済学部西側のグラウンド—小石混じりの原っぱと言った方が似合っていた—での恒例の応用化学科「ソフトボール大会」。我が第3講座「物理化学教室」は、これまで一度も勝利したことがないという弱小集団。そして今回の相手は第6講座「染料化学教室」。この教室は小西謙三御大をはじめ、お隣りの「中百舌鳥ゴルフ倶楽部」の常連を任じている「スポーツマン集団」。ところが、この日の試合は如何なる風の吹き回しか6回表まで「1対1」の同点であった。そして6回裏「1死満塁」で私に4度目の打席が回ってきた。この日は、前の打席で右翼前に幸運な「ポテンヒット」を打ってはいしたが、本当は堺東の「前夜祭？」をひきずっていたのかももう一つ体の切れがなかった。しかし、今更ブツブツいっても始まらない。「エ〜イ どうにでもなれ！！」と第1球を叩いたら幸運にも打球は右翼を守っていた富岡君（岡山・操山高校出身）の頭上を遙かに越えて「葦の茂み」に飛び込んだ。事前のグラウンドルールで「三塁打」。これで我が研究室は「4対1」とリード。7回表をどうにか凌いで勝利した。外山教授に「勝利」を報告したら、「奇跡だな！」とポツリと言われた。その直後である。児玉典弥先生が「大変だ！先刻、東京・日比谷公会堂での党首の公開討論会の席上で社会党の浅沼委員長が暴漢に刺された！」と飛び込んでこられた。これで「今回の我が研究室の初勝利？」の喜びも吹っ飛んでしまった。早速、研究室のラジオのスイッチをいれたら、現場から興奮したアナウンサーの声。暫くして「南海・高野線」の「中百舌鳥駅」で貰ったという「号外」には、正しく右翼少年・山口乙矢（19）が短刀を水平に構えて浅沼氏に切りかかっている写真があった。この年は6月の安保闘争で東大生「樺 美智子」さんが、議事堂突入の大混乱の中で圧死するという痛ましい事件があったばかり。それが漸く沈静化し、特に文系の後輩たちが平静を取り戻しつつあったこの時期に、また「火種」が発生したと暗然としたことを覚えている。今にして思えば、これを契機に社会党の凋落が始まり、当時の「池田内閣」から政権を受継いだ「佐藤」、「田中」という政権のタライ回し—途中、「細川政権」もあったが、所詮「短寿命」—で約50年間が経過しているが、我が国の「その後、議会政治は成熟しただろうか？」と言えば、残念ながら「否」。

もう一つ、この日のプロ野球の日本シリーズは第1戦。三原 脩監督率いる「大洋ホエールズ」対「毎日オリオンズ」。「大洋・秋山 登投手—土井 淳捕手（岡山・東商高→明治大）コンビ」で勝利。遂にこのシリーズは「日本一」に輝いた。それとは対照的であったのは「オリオンズ・西本幸雄監督」。折角リーグ優勝しながら、日本シリーズの敗戦で、当時の「永田雅一『ラッパ』オーナー」の逆鱗に触れてクビ。後年、西本氏は「近鉄バッファロー」監督時代にも、広島カープ・江夏 豊投手の「奇跡の21球」で、またもや「日本一」を逃した。これも西本氏の持って生れた「ホシ」なのだろうか？ 不思議なものだ。

中百舌鳥物語—その4

「美しきサブマリン」

高島 征助

平成20年の2月1日、我が国のプロ野球チームは一斉にチャンピオン。この日が実質的には「シーズン開幕」である。昨年のシーズンは10月半ばの日本シリーズ対「日本ハム」戦で「中日ドラゴンズ」が完勝して「日本一」になり幕を閉じた。

しかし、プロスポーツの世界は競争が熾烈であり、昨年の覇者が今年もその座を獲得できるという保障はないが、私たちが中百舌鳥で過ごした昭和30年代の「南海ホークス」は全盛期であり、とくに昭和34年の日本シリーズの対巨人戦は、杉浦 忠投手の4連投、4連勝という大活躍で悲願の「御堂筋の優勝パレード」。しかし、翌35年のペナントレースは前年の疲れか、もうひとつ精彩を欠き、毎日オリオンズの後塵を拝した。そして36年の2月の10日頃であったと思うが、中百舌鳥球場での南海ホークスのスプリングキャンプも第2クールにはいり、そろそろ練習密度も濃くなる時期。時々、中百舌鳥駅前のホークスの独身寮「若鷹寮」に出入り（マージャンのため？）しているらしい後輩が、ある朝ふらりと実験室に現われ、「今日10時頃から、杉浦投手が本格的な投球練習をすると聞いたんだ。滅多にない機会だ。見に行こう」と誘ってくれた。既に、私は当日の実験に備えてヴァキュームラインの調整もおわり、U字管トラップも液体窒素で冷却済みであったが、このような機会はそれ程あるものではない。窪川先生が図書室に行かれた隙に一目散に球場へ。

さて、当時のスプリングキャンプ風景は今と異なり牧歌的。関西では阪神タイガースと人気を二分していたホークスでさえ、スポーツ新聞の取材記者の姿は疎らであった。グラウンドでは既に投手、内野手、外野手の3グループに分かれて練習中であった。現場の総指揮は、嘗ての名投手・柚木 進ヘッドコーチ、大親分の鶴岡一人監督はベンチ前で股火鉢、のんびり日向ぼっこの図。お目当ての杉浦投手はそこから少し離れた一塁側のブルペンで野村捕手を相手に既にかなり熱のこもった投球練習をしていた。我々3名は厚かましくも鶴岡監督に「野村さんの後ろで見せてもらってもいいですか」とお願いしたら、いとも簡単に「ああ、ええよ。ケガせんようにな」とOKがいただけだ。初めて見る現役最高の投手の球。野村捕手はミットをホームベースの右から30cm外れ、地上から30cmの位置に構えており、杉浦投手の球は鈍い唸りを上げてベース右前の角を鋭く掠め、そのミットに吸い込まれて行く。「外角低目一杯のストライク」である。それを延々と投げ続け、少しでも内側に来ると野村捕手は杉浦投手に向って、今と全く変わらない口調でクレームを付ける。それを受けても杉浦投手は右手で眼鏡を擦り上げ、淡々と「背番号21」がこちらからも見えるほどバックスイングをとり、大きな鳥が羽根を広げるような流麗な下手投げで剛速球を投げ込んでいた。我々はそれを見て「スゲー！！」と声を上げたら、野村捕手が「俺、逃げたるか？お前ら、スギの球受けて死ぬぞ！」と言った。「日本一の技術とはこれ程までに凄いのか！」と感心したのがついこの間のことのように思うが、その杉浦投手も既に亡い。この話には付録がある。選りにもよって、私たちが球場に出かけた直後、停電しロータリーポンプのオイルが上がりかけたのを窪川先生が処置してくださり事無きを得たが、大変なお叱りを戴いた。そのこともあってか、スプリングキャンプと言えはこのことを思い出す。その窪川先生も昨年の11月に他界された。